

編集後記

法然上人が四十三歳の春、かの善導の疏文に遇つて専修念仏に帰された承安五年の年を以て浄土宗の紀元とされているが、今年はそれより丁度八百年目である。法然は釈尊以来仏弟子の在り方の鉄則であつた出家・在家の別すら撤回し、如何なる人をも真実に目覚めさせようとする仏法のいのちを選択本願の念仏として開顕し、仏教を民衆のただ中に開放せんと願われた人である。そこには、凡夫を超越し聖者として目覚めて行くというような在り方とは異つて、生死する人間の現実を自己自身の内面に見出そうとする深い実存凝視のあることを看過してはならない。徹底した実存凝視に於て世と共に救われる普通の道を求めて改めて仏教に問うた法然にとつて、そこに見開かれた仏道が阿弥陀の本願を信じ念仏するという念仏往生の道であつたのである。されば建仁元年に法然に遇い得た親鸞聖人が、その出遇いに於て感得したのも、実に本願念仏との値遇である。そしてそれは、一乗仏教の実現を願ひとする日本仏教の課題が、現に此処に具体的に解決して示されているという深い領きで

あつたに違ひない。生涯を通して自己を語ることのなかつた親鸞が、吉水時代の出来事を悲喜の涙を抑えて叙しているのを見ても、師法然との値遇が如何に感激深いものであつたかが知られる。和讃その他で語つていられるように、その一生の全体が法然に遇い、その教えを聞くような一生であつた。「本師源空いまさずは、このたびむなしくすぎなまし」と。凡そ、人生を空しく過ごしたくないということは、如何なる人間にとつても最も本源的な願いである。然るに親鸞は「本願力にあひぬれば、むなしくすぎるひとぞなき」と、師との値遇を通して願力の世界に生きられたことを讀じている。値遇——そこにこそ仏法興隆の根源がある。我々の人生の最深の願いも、かかる値遇に生きることより外にないであらう。

そこで本号では、この記念すべき年に法然鑽仰の意趣を以て、法然上人に関する論稿を特輯しました。学外の坪井、大橋、奥村、藤本の諸先生には、本誌の願ひに心よく賛同頂き貴重な玉稿を寄せて頂きました。又いつもながら金子先生には味得ある玉稿を頂き、藤原、白井両先生には御多用のところ寄稿して頂きました。併せて御礼申し上げます。(小野)

昭和49年12月10日 印刷
昭和49年12月20日 発行

親鸞教学 第25号 号 550

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会

親鸞教学編集部

発行人 細川行信

大谷大学真宗学研究室 振替 京都 8225番

京都市中京区寺町通三条上ル

文栄堂書店

振替 京都 2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50

中村印刷株式会社

電話 (313) - 0468番

編集
発行

発売

印刷